

2014 年度 修士論文

中国のプロ野球リーグ C B L に関する研究

STUDY ON THE PROFESSIONAL BASEBALL LEAGUE OF
CHINA (CHINA BASEBALL LEAGUE)

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5013A066-7

李彤枫

TONGFNEG LI

研究指導教員：平田 竹男 教授

目次

第1章	序論	1
第1節	背景	1
第1項	中国の野球史	1
第2項	CBLの概要	7
第2節	先行研究	10
第1項	野球のグローバル化研究	10
第2項	CBLに関する研究	11
第3節	目的	12
第2章	研究手法	13
第1節	各リーグについての比較	13
第1項	各国のプロ野球組織の変遷およびMLBとの関係	13
第2項	各リーグの興行ビジネスとしての成り立ち	13
第3項	各リーグのレギュレーション	13
第2節	類似リーグとの事例比較	13
第3節	情報、データの収集	13
第3章	結果	13
第1節	各国プロ野球リーグについての比較結果	13
第1項	各国におけるプロ野球組織変遷とMLBとの資本的関係	13
第2項	各リーグ興行ビジネスの成り立ち	17
第3項	各リーグのリーグレギュレーション比較	19
第2節	類似対象リーグとの比較	20
第1項	プレーオフの設計	20
第2項	地域国際大会	21
第3項	MLBアカデミー	22
第4項	新球場の利用状況	24
第4章	考察	25
第1節	CBLは消費者を抱える国内完結型興行ビジネス	25
第2節	「市場」を目指したトリプルミッションの構築	26
第1項	「勝利」からアプローチ	28
第2項	普及からアプローチ	29
第3節	トリプルミッションの好循環に向けて	34
第5章	結論	35
第6章	謝辞	36
第7章	参考文献	36

図表目次

図 1-1	中華民国五年、三氏図書公司.....	1
図 1-2	中華民国二十年 商務印書館.....	2
図 1-3	中華民国十年 上海勤奮書局.....	2
図 1-4	時系列で見る中国代表チーム成績：平均点差/1 試合.....	4
図 1-5	威信をかけた国際大会における成績：平均点差/1 試合.....	4
図 1-6	「首都大学野球、ソフトボール選手権」チーム数推移.....	5
図 1-7	大学チームの地理的分布.....	7
図 1-8	社会人チームの地理的分布.....	7
図 1-9	C B L の沿革.....	8
図 1-10	種目別新規体育局に登録した人数.....	10
図 3-1	リーグごとのポジション.....	18
図 3-2	B C リーグプレーオフシリーズ試合方式.....	20
図 3-3	イタリア M L B アカデミーの様子.....	22
図 3-4	中国南京東山外国語高等学校「M L B 発展中心」の様子.....	23
図 4-1	労働分配率の国際比較(雇用者所得/名目GDP).....	27
図 4-2	アンケート結果 C B L への関心度 N/135.....	28
図 4-3	中国中央テレビによる 2014 シーズン表彰式に関する報道.....	29
図 4-4	北京テレビによる 2014 シーズン北京タイガーズベテラン選手王偉氏のインタビュー.....	30
図 4-5	「棒球樂園」ツアールート及び経由する C B L フランチャイズ都市.....	31
図 4-6	アンケート調査による被験者の I D 分布と C B L チームの所在 N/135.....	33
図 4-7	アンケート結果 C B L が発展していく上での重要要素ランキング N/135.....	34
表 1-1	「2014 年大学生選手権」参加チーム数、地域分布及び区分.....	6
表 1-2	2014 年現在社会人チーム数、地域分布及び区分.....	6
表 1-3	C B L のスポンサー.....	9
表 1-4	C B L 2014 シーズンスポンサー.....	9
表 3-1	各国におけるプロ野球組織変遷と M L B との資本的關係.....	13
表 3-2	各リーグ興行ビジネスの成り立ち.....	17
表 3-3	各リーグのリーグレギュレーション比較.....	19
表 3-4	試合フォーマット プレーオフ.....	20
表 3-5	近年開かれたカリブと東アジア地区の国際大会.....	21
表 3-6	各国新築球場及びその後リーグの利用状況.....	24
表 4-1	M L B 番組「棒球週刊」の国内放送と C B L フランチャイズ地所在.....	31

第1章 序論

第1節 背景

第1項 中国の野球史

中国人が初めて野球をしたのは約120年前。「中国鉄道の父」とも呼ばれる詹天佑氏らが清政府からアメリカに派遣された後に、イエール大学でチームを創立したのが最初だと言われている。その後、日露戦争（1904-05）以降、東アジア地域にヘゲモニーを構築して行った日本による影響が大きかった。特に1903年、野球は湖南省に伝わり、呼び方も「野球」そのままであった。当時辛亥革命をリードし、キーマンとなったうちの一人黄興氏によって湖南省最初の野球チーム「陽子江野球隊」が結成され、また1911年に「湖南同盟会」によって組織化の象徴とも言える「野球会」が設立された。特にこの時期には後中華民國臨時大統領であった「国父」孫文の支持を得、軍隊、学校、民間では野球普及の勢いが付いたという。しかし、詹天佑氏らは帰国後仕事に冒頭したため、彼らのアメリカ系野球が中国に広がることはなかった。彼らより、野球の普及活動に尽力し、貢献が大きいとされているのは、日中戦争前に帰国した「横浜中華棒球隊」の主力選手であった梁扶初氏だという。図1-1～図1-3は、中華民國時期出版された野球に関する書籍の数々である。

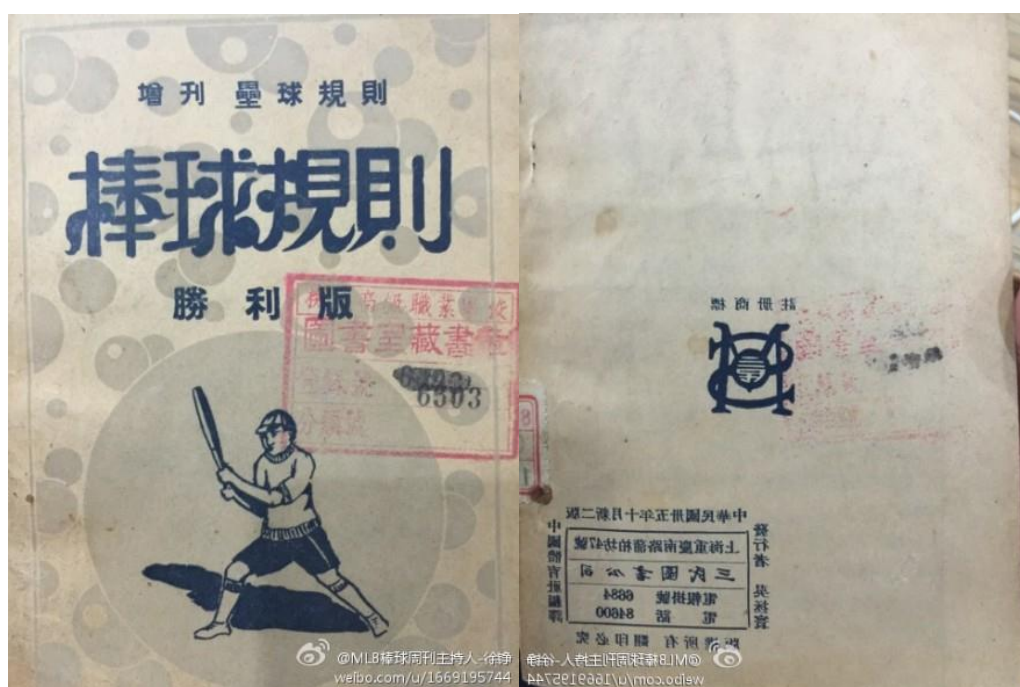


図 1-1 中華民國五年、三氏図書公司

出典：Weibo.com@MLB「棒球週刊」キャスター徐铮

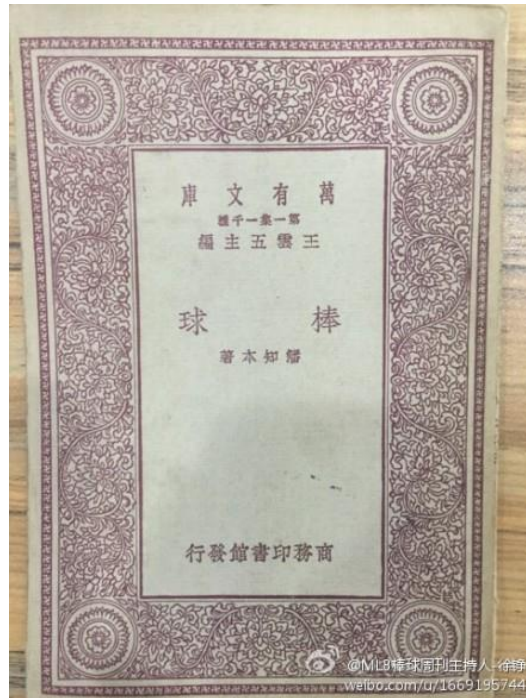


図 1-2 中華民國二十年 商務印書館

出典：Weibo.com@MLB「棒球週刊」キャスター徐铮



図 1-3 中華民國十年 上海勤奮書局

出典：Weibo.com@MLB「棒球週刊」キャスター徐铮

新中国成立後、1959 年に行われた第 1 回全運会（全国人民運動会、国体に相当）では 30 以上もの省市が野球競技に参加したという記録が残っている。この時期に台湾

籍日本生まれのアマチュア選手だった李敏寛氏が1953年に北京市チームに加入し、チームを全国チャンピオンに導いた。その後解放軍司令官賀龍氏の招聘により、李敏寛氏、梁氏家族は各解放軍チームの指導者として、野球を教えた。しかしながらこの時点ではまだ国内の統括組織は存在せず、国際大会に出場するということもなかった。しかし、文化大革命において、毛沢東主席の動員の下、1600万もの青年が農村地区に肉体労働をさせられ、次第にスポーツチームも余儀なく解体され、中国の野球はふりだしに戻ることになる。1979年によりやく初の統括組織、中国棒壘球協会（野球・ソフトボール協会）が誕生することとなった。主要な省・市チームの全国選手権、全国運動会は復活を果たしたが、文化大革命の前の規模には戻らなかった。その背景には文化大革命が起きた期間に野球競技者が存在しない、いわゆる「野球経験世代の喪失」を生み、野球が中国において元の勢いを取り戻すことはできなかった。また、この年に、1979年、日中が国交を正常化した翌年、千葉の少年野球チーム、幸町リトルインディアーズが中国に遠征。北京や上海で試合を行った。まだまだ中国の少年野球はレベルが低かったが、友好を第一として交流を実現した。また、遠征中は中国体育総会主催の晩餐会や子どもたちの交歓会なども開かれた。

野球の中国代表が初めて国際大会に出場したのは1987年だと言われているが、実際には1985年のアジア野球選手権に出場したという記録が残っている。

この大会は全敗で終えたが、1987年アジア野球選手権ではインド相手に国際大会初勝利を挙げている。また1986年には中国棒球協会が単独で誕生し、野球途上国としては数少ない、野球協会がソフトボール協会と分離された国となっている。その後は着々と国際試合への進出を果たし、アジアでは古豪・フィリピンを追いやって4番手へ浮上。1998年に初めてワールドカップ出場を果たすこととなった。

そして近年、北京五輪の初五輪出場で、台湾を破り8位を獲得し、2006年第1回WB Cにて4-0台湾に大勝を挙げ、代表チームの最高記録を塗り替えた。グラフ1は各年に参加した国際大会の全試合の点差を平均化したものである。大会の内訳：B F Aアジア野球選手権、I B A Fワールドカップ、アジア競技大会、WB C、オリンピック、そして代表選抜が出場するアジアシリーズ。

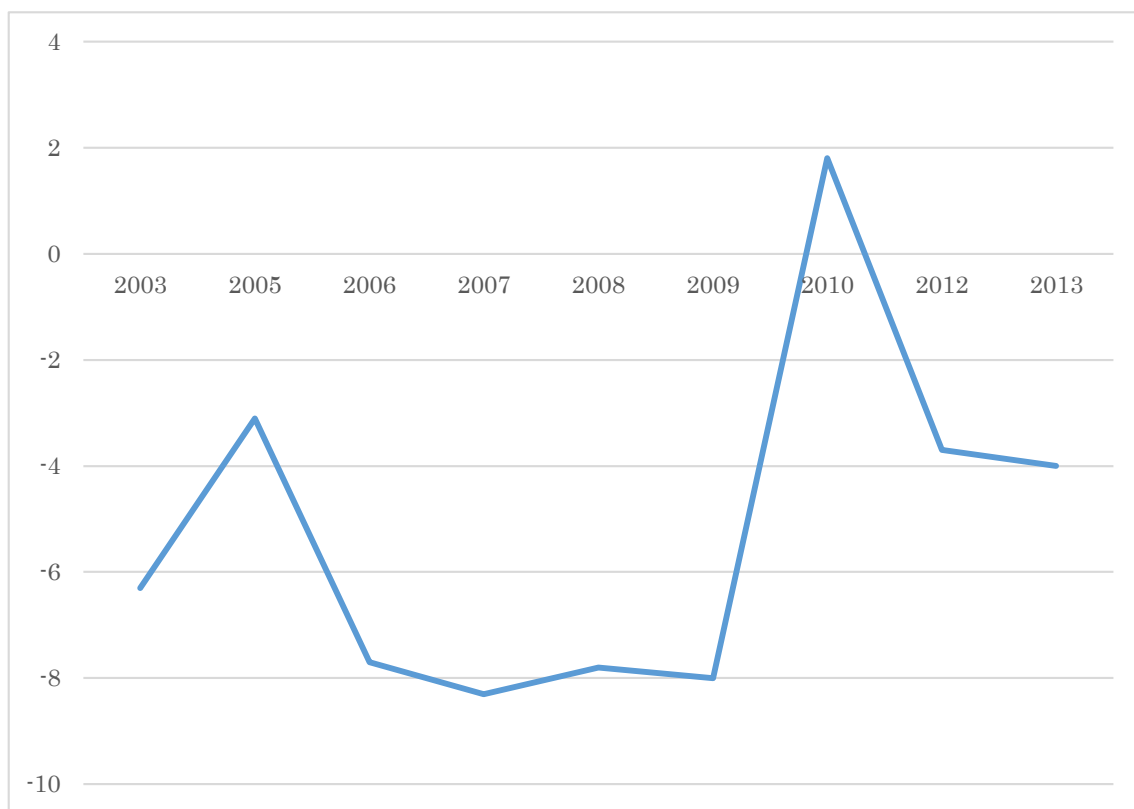


図 1-4 時系列で見る中国代表チーム成績：平均点差/1 試合
「Westlian' s lab」より筆者作成

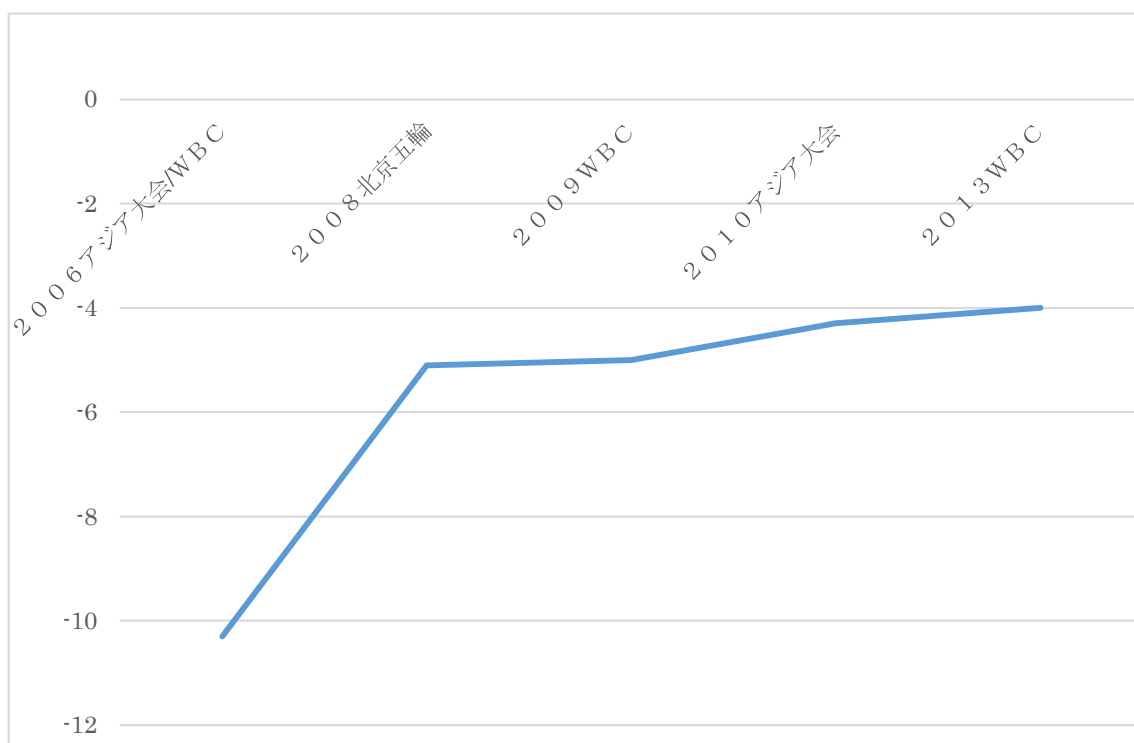


図 1-5 威信をかけた国際大会における成績：平均点差/1 試合

全大会の試合点差を加算した結果とは対照的に、国の威信をかけた格式高いオリンピック、アジア大会、そしてWBCなどの国際大会だけでは、グラフ2が示しているように、成績を維持していることを表している。

近年、中国では民間における野球の普及が目立っている。筆者は北京五輪以前から北京の大学で野球を始めた。年一回所属チームが草野球大会へ出場することで、年々参加するチームの数が増え、民間での普及が加速化していることを感じる。そこには大学チームと社会人草野球チームの2大集団がある。

北京で開かれる「首都大学野球、ソフトボール選手権」には、2008年よりMLBからの運営援助があり、大会規模を一気に増やすことを実現した。以下示した通り、北京地区では大学チーム数が一番多く、密集度が高い。一方、上海にある社会人草野球チーム数は国内最多である。こう言った現状に至った背景には歴史的伝承があると言えるだろう。以下図1-6～図1-8は「Douban@豆瓣打棒球小组」より筆者が作成したものである。

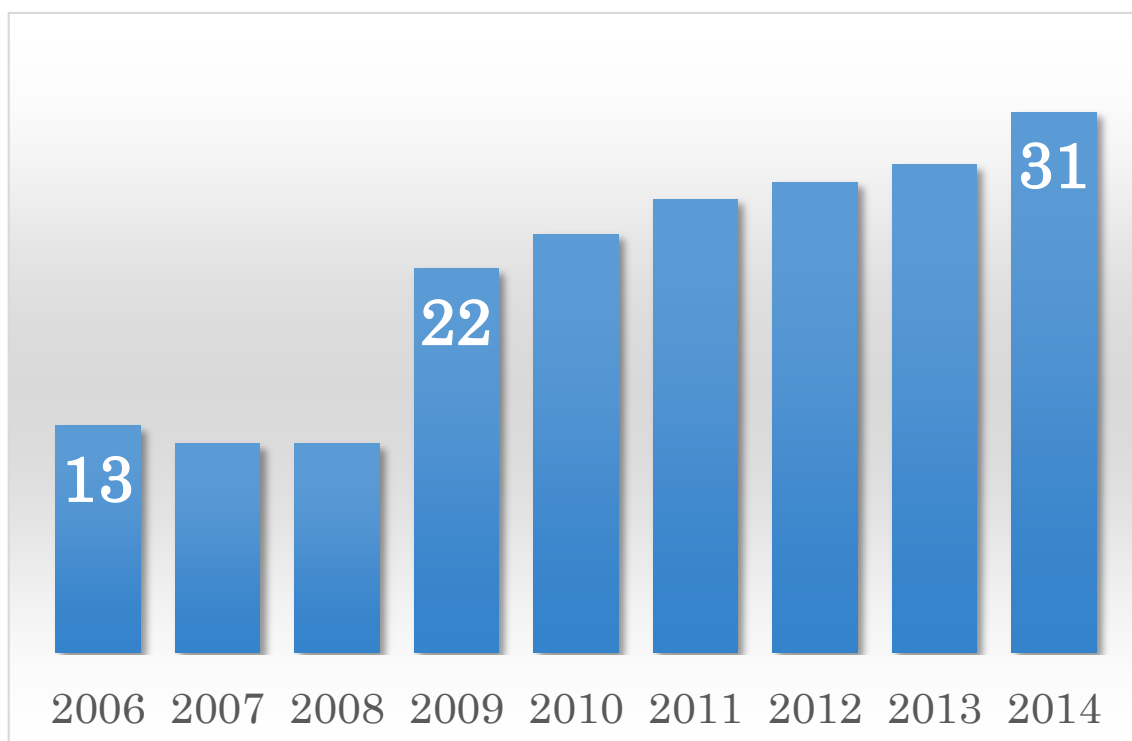


図 1-6 「首都大学野球、ソフトボール選手権」チーム数推移
(天津、河北地区チーム有)

表 1-1 「2014 年大学生選手権」参加チーム数、地域分布及び区分

地域	チーム数	区分			
		体育局傘下	高レベル	一般大学	専門大学
北京	18	1	1	16	0
上海	14	0	2	12	0
華中	10	2	0	8	0
華東	11	0	4	5	2
華南	16	0	0	14	2
華北	2	0	0	2	0
西南	6	0	0	6	0
西北	2	0	0	2	0
東北	1	0	0	1	0
香港	2	1	0	1	0
合計	82 チーム	4 チーム	7 チーム	67 チーム	4 チーム
		5%	9%	82%	5%

表 1-2 2014 年現在社会人チーム数、地域分布及び区分

	チーム数	割合	区分			
			一級市	二級市	三級市	四級市
華北	8	15%	5	2	1	0
華東	18	35%	7	4	5	2
華中	3	6%	0	3	0	0
華南	9	17%	5	0	4	0
西南	8	15%	0	4	4	0
西北	3	6%	0	2	1	0
東北	3	6%	0	2	1	0
合計	52	100%	17 チーム	17 チーム	16 チーム	2 チーム
			33%	33%	31%	4%

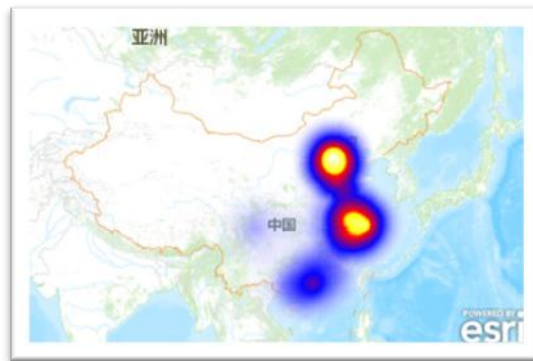


図 1-7 大学チームの地理的分布

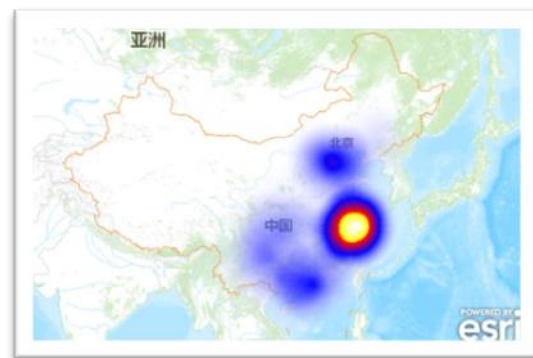


図 1-8 社会人チームの地理的分布

北京地区では大学野球チームの密度や数が全国でみても一番高く、カレッジスポーツとして大きく発展している。上海を含む華東地区では社会人野球がもっとも多く、また社会人野球は大学野球のように一級都市集中より広い範囲で存在していることが図 1-7～図 1-8 から見て取れる。

第2項 CBL の概要

C B L は中国棒球協会の開催する中国のプロ野球リーグである。1970 年代から北京や上海などの都市で再び野球チームが結成され始め、現在では十数の野球チームが存在している。2008 年に行われた北京オリンピックに後押しされ、その中でも強豪とされる北京市、天津市、上海市、広東省のチームが新リーグを結成、2002 年に CBL として発足した。2010 年までは 7 チームによる 1 リーグ制でリーグ戦が行われていた。2010 年は経済的な理由から、リーグ戦はわずか 1 ヶ月だけ行われた。2012 年、2013 年からはリーグ戦そのものが中止されたが、2014 年に再開された。

CBL						
2002	北京	天津		上海	広東	
2003						
2004						
2005			四川			中国ホープスターズ
	↓	↓	↓	↓	↓	↓
2006	西南華北地区			東南華南地区		
	北京	天津	四川	上海	広東	江蘇
2007						
2008						
2009						河南
2010						
2011						
2012	リーグ戦中止					
2013						
2014前半	リーグ戦復活					
2014後半						

図 1-9 CBLの沿革

出典：Wikipedia、CBL ホームページより筆者作成

リーグ発足時、日系企業からのスポンサー協賛がリーグ立ち上げの大きな要因となり、そのおかげでCBLは一時期躍動をした。チームの移動は飛行機ビジネスクラスで、トップ選手の待遇もかなりの高レベルに達していたという。しかし、プロパガンダ効用が果たしきれなかったCBLには、2008年北京五輪限り日系スポンサーの撤退に伴い、活気を失いつつあった。やがて2012シーズンリーグ打ち切りとなった。「五輪競技から削除されたのは最大の悲劇。CBLの発足自体が、五輪に向けての代表チーム強化を目的としたものであったことを考えると、次回五輪から実施されなくなったことは、これ以上プロリーグを運営する必要性はなくなったことを意味するとも考えられる。プロパガンダ機能を野球に求めるのは不可能。世界的不況と野球の中国での宣伝効果への疑問から日系スポンサー、MLBの中国への関心が低下してきたとされていた。」(石原, 2008)などとされていた中、2012、2013シーズンリーグ戦中止を経て、2014年にリーグ復活した。

表 1-3 CBLのスポンサー

2003年10月26日号「南方都市报」<http://sports.sina.com.cn>より筆者作成

	2003	2004	2005	2006	2007	2008
北京 タイガーズ	ANA・POCAR	ANA・POCAR	ANA・POCAR			
天津 ライオンズ	日立建機	日立建機	日立建機			
上海 イーグルス	SUNTORY・小松電機・日清	SUNTORY小松電機・日清	SUNTORY			
広州 レオパード	CALBEE	CALBEE	CALBEE			
リーグ	CANON・Upper Deck・Northwest Airline	Upper Deck・Northwest Airline・MIZUNO	MIZUNO	MIZUNO	KENKOBALL	MIZUNO・CANON
代表チーム	ZETT					
2003~2006				2006~2008		
運営会社	日系スポーツマーケティング会社「王朝体育, Inc」			ソフトバンク「中国棒球企画会社, Inc」		

表 1-4 CBL 2014 シーズンスポンサー

出典：CBL ホームページ、スポンサー企業ホームページより筆者作成

2014	企業名	業種
リーグスポンサー	A&S Dental	歯科医療器具
	北京農商銀行	銀行
	納麗徳	家電
	紅星	アルコール飲料
	楽視	インターネット
	新浪ビデオ	インターネット
	搜狐ビデオ	インターネット
運営会社	恒達体育, Inc	

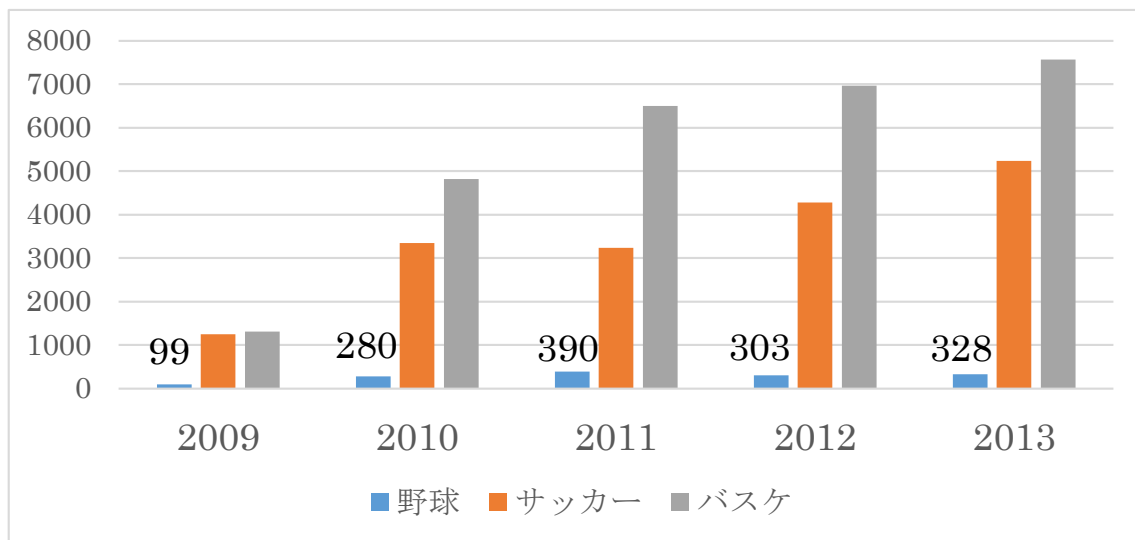


図 1-10 種目別新規体育局に登録した人数

国家体育总局総局インフォセンタ All rights reserved beta v1.0.3 より筆者作成

大学チームや社会人チームから見ると、民間での普及は進んでいる兆しは見えてくるが、グラフ4の示している通り、中国の各級体育局に新規登録した将来プロリーグの候補選手になりうるアスリートの人数で見ると、「プロ野球選手」である魅力はサッカーやバスケットにはまだ比べられない、プロスポーツとしての野球はまだ発展途上ではある。

将来性が見込められなかった中、自国資本に切り替えて再スタートしたCBLだが、決して普及度が高いとはいえない国内において、集客を図るプロスポーツ興行ビジネスとして継続的に発展していくために、海外のプロリーグに目を向け、世界的に見ればCBLは其中でどのような位置づけなのか、他のプロリーグとはどのような相違があるのか、学ぶところはどこにあるのかを探究していく必要性があると考え、本研究を計画した。

第2節 先行研究

第1項 野球のグローバル化研究

B・キッドに代表された、アメリカ資本との結びつきを強めたカナダプロアイスホッケーリーグが社会への影響力を増大させるように国民のアイデンティティ衰退を見ていた研究があった。この頃の研究においては、アメリカ化の文脈でスポーツのグローバル化が論じられた。

また、ドミニカなどカリブ地域野球のMLBによる包摂に、I・ウォーラステインが唱える近代世界システムにおける周辺国の低開発の図式を見たA・クラインは、野球の普及を、「中核国」であるアメリカと「周辺国」であるドミニカとの間の文化事象を介した垂直的関係の構築とみなし、「文化帝国主義」の用語でこれを表した。

これに対し、A・グットマンは「スポーツと帝国」において、近代とスポーツの関連を強調した上で、周辺国によるスポーツ受容は、中核国内部における伝統スポーツの消滅と本

質的には変わらないとし、強者の文化を弱者が自ら受容する「文化ヘゲモニー」の言葉をスポーツの世界的普及に当て、これを「近代化」の概念で読み解いた。

S・サッセンは、著書「グローバルシティ」で生産や労働の移動に関して、国境が意味をなさなくなる中、海外移転が可能な産業は賃金の安い低開発国へ移転する、と指摘している。

このような近代グローバル化という視点で野球の国際的普及を捉えたクラインは著書「シュガーボール」において、周辺国の野球リーグは中核国への人的資源の供給源となり、その結果、周辺国はスポーツに世界においても低開発の状態にあることを、主張した。この構図の下では、カリブ地域のプロ野球が、アメリカのMLBのための選手育成の場という役割を脱して、MLBに匹敵するような、高い競技レベルでシーズンの長いプロリーグに発展することは、考えにくい。

クラインの理論を踏まえ、石原は²米国の四大メジャー（野球、アメリカンフットボール、バスケットボール、アイスホッケー）などのプロスポーツは、今や地球規模の娯楽産業と化し、世界中の人々の心をとらえながら巨大ビジネスへと変貌を遂げている。その結果、そこでプレーするトップアスリートの報酬は、天文学的数字に跳ね上がっている。その一方で、プロスポーツ資本は、人材獲得網も地球規模に展開させていくのであるが、この結果が、世界各地で起こっている人材育成の場の拡大としてのプロ化の進展と、それに伴う低報酬のプロアスリートの増加である。つまり、近年のスポーツのプロ化を伴ったグローバルな拡大は、人材育成の場のリロケーションとも考えられる、それ自体ではビジネスになりにくい小規模プロスポーツを発生させ、そこでは安価な労働力と化したアスリートの移動が展開されるのである。このようなプロスポーツの発生は、現在のスポーツのグローバル化の新たな潮流と言える。

第2項 CBLに関する研究

姚佳 2010（首都体育学院、体育教育学、修士）は欧米先進諸国のスポーツビジネスからリーグビジネスの理論や概念の解説から入り、日米のプロ野球ビジネスと比べながら、CBLのビジネスモデルに悲観論を論じ、米国大リーグに模倣すべきであると主張した。―「中国プロ野球リーグCBLのビジネスモデルに関する研究」

苏日光 2008（ハルビン体育学院学報）は2002年プロリーグ発足年の論文とのことで、CBLにおける木製バットの使用、外国人選手契約の容認、スポンサー参入などの要素でCBLはプロリーグであることを論じた。また、リーグ内移籍に関する地域保護の現象、市場開発の不足など問題点を指摘し、今後はプロスポーツの法規制に乗っ取った商業的開発が望まれるのと学校のスポーツ教育科目に導入することで野球人気を育むことを提示した。「中国野球のプロ化に関する研究」

第3節 目的

本研究の目的は世界各国のプロ野球リーグビジネスを俯瞰するとともにC B Lとの経営要素においての差異を明らかにすることである。

第2章 研究手法

世界各国のプロ野球リーグ、とりわけ新興プロ野球リーグと比較し、分析する。調査対象は中国 CBL を始め、ドミニカンリーグ、ベネズエラリーグ、メキシカンリーグ、メキシコ LMP、パナマ、コロンビアン、ニカラグアン、日本 NPB、日本 BC、韓国 KBO、台湾 CPBL、イタリア IBL、オーストラリア ABL、イスラエル IBL に絞る。

第1節 各リーグについての比較

第1項 各国のプロ野球組織の変遷および MLB との関係

対象リーグが所在する国々において、プロ野球組織の発足、改組、中止などを時系列で洗い出し、並びに各節目において MLB 資本の関与の有無、または 1970 年代海外で設立される MLB 資本の野球アカデミーの設置の有無を調査する。

第2項 各リーグの興行ビジネスとしての成り立ち

2014 年シーズンのデータの元、チーム数、総試合数、平均観客動員数、中間ランクのチケット代を調査し、掛け算で興行売り上げ規模を試算する。それから選手賃金も含めて調査する。

第3項 各リーグのレギュレーション

ポストシーズンマッチの形態、外国人、開幕開催時期、アメリカシーズンとの重なり。

第2節 類似リーグとの事例比較

各リーグのリーグビジネスを比較した上、より絞られた中国 CBL と類似しているリーグにさらに焦点を絞り、プレーオフの設計、地域別国際大会、MLB アカデミー、新球場の起用状況について比較分析を行う。

第3節 情報、データの収集

情報やデータの収集は主に以下の方法で行った。

- ・ 各リーグのホームページ
- ・ アメリカ野球データベース Baseballreference.com 及び Lahman.com
- ・ baseballdeworld.com by Journeyman Media
- ・ NPO 法人「Baseballbridge」代表田中氏へのインタビュー。
- ・ 調査対象リーグ所在国でプレーする選手への取材。

また、リーグに関するデータは 2014 年シーズンのデータを利用した。ただしイスラエル IBL は 2007 年 1 シーズン限りで休止したため、2007 シーズンのデータを用いた。

第3章 結果

第1節 各国プロ野球リーグについての比較結果

第1項 各国におけるプロ野球組織変遷と MLB との資本的関係

表 3-1 各国におけるプロ野球組織変遷と MLB との資本的関係

リ：夏季プロリーグ；冬リ：冬季プロリーグ；ア：アカデミー；独リ：独立リーグ

■0% ■ 出資 ■ 100%出資

国	1920s	1930s	1940s	1950s	1980s	1990s	2000s	2010s
ドミニカ	21 リ発足 36 リ再開			51 リ再開 54 冬季化	80 ア	95 サマー リ発足		
ベネズエ ラ			46 リ発足 55 プ拡充		80 ア	97 サマー リ発足		
メキシコ	25 リ発足		45MLB傘下 独冬リ 発足					
中南米			46 リ発足				01 冬リ 再開 09 冬リ 再開	11 冬リ 再開
パナマ			48 冬季化					
コロンビ ア			43 リ発足			93 冬リ再 開		
ニカラグ ア				56 冬リ発 足			04 冬リ再 開	
日本	34 リ発足		49 リ拡充				07 独リ発 足	
韓国					82 リ発足			
アジア	台湾				89 リ発足		03 リ拡充	
中国							02 リ発足	10・13 ア 12 リ休止 14 リ再開
欧州	イタリア						04 ア	10 リ改組
オセア ニア	豪				89 リ発	99 リ休止	01 ア	10 リ再開
中東	イスラエ ル						07 リ発 足 08 リ休 止	

結果1をまとめたのが表3-1である。アメリカのほか、世界中のプロリーグの組織された歴史を辿る表である。野球の伝来が比較的早いとされる中南米を見ると、世界大戦前後に渡り、数々のプロ野球リーグが誕生した。その内、ドミニカ、ベネズエラ、メキシコなどは、独立運営でMLBの開催期間と重なる夏季リーグとしてスタートしながら、第2次世界大戦後しばらくの間に業務提携契約などでMLB機構に収まり、冬季リーグ化され、MLB機構のファームリーグと化した図式が見て取れる。

1916年アメリカに占領され、軍政下に置かれた背景の下、ドミニカ野球はますます普及し、1921年にプロリーグは開始された。その後世界恐慌やアメリカからの選手引き抜きでチームの財政難はあったが、1950年代になってようやく活況を呈していた。アメリカと同じく夏季リーグとして実施され、政府の援助、テレビ中継の開始などいい環境に恵まれ、ドミニカプロ野球は黄金時代を迎える。しかし、アメリカ国内数々の野球リーグの統括を完了したに伴って、MLBはアメリカ資本の世界的拡大の一翼を担って、カリブ地域に進出した。夏季リーグで始まりながら、MLBとの張り合いが経営を圧迫し、MLBの実施期間と外れ、冬季化されたことがその進出の結果を表している。また、54年シーズン後に業務提携関係が結ばれ、その直後アメリカに渡ったドミニカ人初メジャーリーガーオジー・バーズルをはじめ、ドミニカからMLBへの選手流出が活発になる。

1980年代の初めにはドジャースとブルージェイズがドミニカに乗り込んで、選手たちが練習できる球場を作り、少年たちに野球の基礎を教え、その中から優秀な素材をアメリカに送り込む仕組みであるアカデミーを設立した。その後MLBの各球団のアカデミー設立がブームとなった。それから30年近くの時を経て1985年から再びこの国に夏季に行われるリーグが行われるようになった。しかし、この夏季リーグは以前の夏季リーグとは性格大きく違い、この「サマーリーグ」に加盟している各チームは、メジャーリーグ球団の傘下になっていて、マイナーリーグのルーキー級として扱われている。各球団が好素材の獲得にしのぎを削り、野球少年たちをアカデミー集め、サマーリーグでトライアウトを行い、頭角を経て這い上がった選手を常駐させたスカウトによってアメリカの自軍球団に送出される。

メキシコでは、1925年に5球団で始まったメキシカンリーグだったが、1940年代に入るとMLBに匹敵するようなリーグまで成長した。しかし、1946年から48年の間に36万2000ドルの損失を出したLMBは、4球団に縮小、メキシコシティで全ての試合を消化する地方リーグへと転落した。1949年にリーグ会長の座から降りたパスケルが1955年に急死すると、メキシカンリーグはMLB機構の中のマイナーリーグのひとつとして組み入れられ、MLBの傘下に収まった。(Virtue: 2008, 203)。メジャーリーグに選手を送り込む上でも、他のラテンアメリカの国とは状況が違って、メジャーリーグのチームがメキシカンリーグのチームから選手の契約を買い取る形になる。実際、自軍の選手をメキシコに送り込んで経験を積ませたり、メキシカンリーグ球団からの選手獲得のルートを確立したりす

るなど、事実上これをファーム化している（Klein：1997, 146-147）。

時代は 1990 年に入る。一步先にプロリーグを発足させた、野球が国民的スポーツである韓国、台湾のほか、アジアにおいてすでにトッププロリーグが存在した日本では独立リーグであるBCリーグが発足した。

1989 年の豪州初のプロリーグ（旧ABL）が 8 チームで開始された。このリーグの資金、運営面においてMLBから援助がなされ、各球団にもMLB球団のスポンサーがついた。さらにはリーグに対して米系多国籍企業のペプシ・コーラがスポンサーとして 50 万ドルを拠出した。また、このリーグのプレーオフがテレビ放送された後、MLB の衛星放送が始まった。その後、経営は不安定で、結局旧ABLは、1999 年限りで活動を中止した。しかし、その直後 2001 年に、MLB 単位の選手育成装置であるアカデミーを開設させた。また、9 年の間を置き、2010 年に冬季リーグ（7）として発足した新生ABLには、MLB が資本金の 75%を拠出している（前田：2010）。

イタリアに関しては、オーストラリアと同じような構図が窺える。2004 年にトスカナ州にMLBによる野球アカデミーが開設され、その年に育成された 4 人のイタリア人がMLB球団と契約した。さらに欧州およびアフリカの若手をアメリカに送る前にアカデミーに集結させ鍛えさせた。また、6 年後に、元アマチュアリーグであるトップリーグのセリエAを改組し、トップチーム 8 球団によるIBLを発足させた。

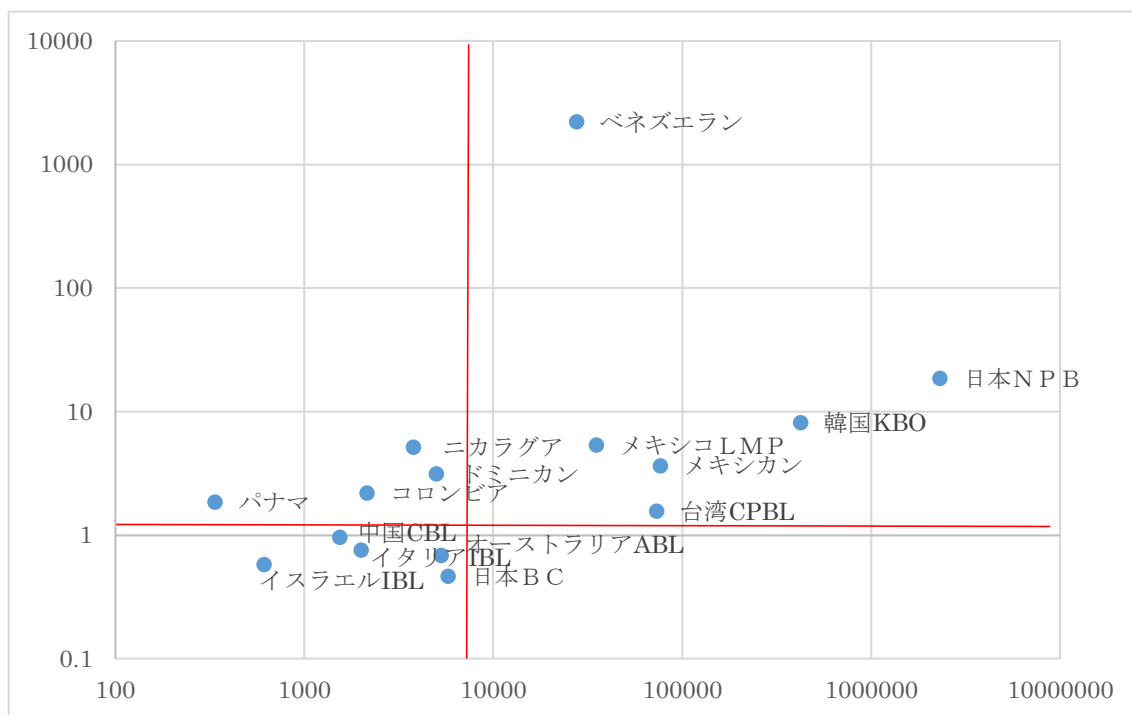
中国では、2002 年にたくさんの外資系スポンサーを集った中で、従来の省が抱えるステート・アマ球団の中トップ四チーム北京、天津、上海、広東をプロチームに昇格させ、CBLを発足させた。この際にMLBの資本関与は一切見られなかった。7 年間後の 2009 年に江苏省常州市北郊中学と江苏省无锡市東北塘中学校に二箇所、それから 2013 年に南京市中山外国語中学校に一箇所MLB単位のアカデミー「MLB発展中心」を設置した。

以上のリーグで見るCBLの特徴として、発足時期においてはイタリアIBL、オーストラリアABL、BCリーグ、イスラエルIBLとは同じでありながら、イタリアIBL、オーストラリアABL、イスラエルIBLと全く質が違うのは、MLBから直々な投資がないところである。ただし、MLBが完全出資するMLB単位の野球アカデミーはイタリア、オーストラリアのそれぞれ一箇所より 3 箇所も設置されてある。また、アジアのほかの国々日本、韓国、台湾にはMLBのアカデミーは置いていない。BCリーグと比較すると、CBLは中国におけるトップリーグである一方、BCリーグが所在する日本にはすでにトッププロリーグがほかに存在するという相違点が挙げられる。経営難で休止に追い詰められ、また復活を果たした点では、CBLとオーストラリアABLが挙げられ、オーストラリアABLに関しては、リーグ中止から復活までには 10 年間もの時間がかかり、しかも復活の決め手となるのはMLBの援助であったに対し、CBLは復活まで 2 シーズンの間しかおいてなく、しかも外資系スポンサーのいない中すべて自国企業のスポンサー、及び新規契約を交わした自国の運営会社によって立ち直られたのである。

第2項 各リーグ興行ビジネスの成り立ち

表 3-2 各リーグ興行ビジネスの成り立ち

リーグ	チーム数	総試合数	平均観客動員数	チケット代興行売り上 中間ランク規模（万 円）	選手賃金 （万円/月）	
ドミニカン	6	150	560	350	2940	13
ベネズエラン	8	248	890	950	20968	11
メキシカン	15	825	989	1000	81592	19
メキシコ LMP	8	70	1522	1200	12784	28
パナマ	6	42	146	600	367	18
コロンビア	6	150	180	640	1728	18
ニカラグア	4	96	130	556	693	17
日本 N P B	12	864	26457	3900	8914950	598
日本 B C	6	216	860	1200	22291	15
韓国 KBO	9	576	16000	1200	1105920	273
台湾 CPBL	4	200	6756	1140	154036	27
中国 CBL	7	88	520	800	3660	8
イタリア IBL	8	240	326	888	6947	24
オーストラリア ABL	6	120	1357	2110	34359	32
イスラエル IBL	6	132	229	750	2267	16



横： 興行規模/国の一人当たりGDP・縦：選手平均月収/国民平均月収

図 3-1 リーグごとのポジション

中国の一人当たり GDP は、上位 150 都市の平均を取った数値である。国民平均月収は 労働統計総合データベース「ILOSTAT」から得た数値である。

横軸が表している通り、一人当たりGDPに対する興行規模が比較的に小さい各リーグと野球のメジャーな国に存在する各リーグとは「10000」のところでグループ分けできると見られる。さらに、縦軸は各リーグの選手の賃金水準はその国の平均月収に対してどのレベルにあるのかを表す。「1」以下、つまり国の平均水準を下回っているリーグには中国CBL、イタリアIBL、オーストラリアABL、日本BCとイスラエルIBLがある。

第3項 各リーグのリーグレギュレーション比較

表 3-3 各リーグのリーグレギュレーション比較

リーグ	開催時期 (月)	外国人枠	外国人受 入人数	各国出身の夏季海外組み			冬 季 海 外 組 み
				海外組総数	メジャー組	マイナー 組み	
ドミニカン	10—1 冬	—	97	989	85	800	81
ベネズエラ	10—12	—	111	741	63	440	25
メキシカン	4—9 夏	—	110	111	8	68	4
メキシコ冬 季	10—2	—	162	—	—	—	—
パナマ	11—1	—	3	104	5	44	32
コロンビア ン	12—2	—	55	88	4	35	8
ニカラグア ン	11—2	—	30	38	2	16	5
日本NPB	4—10	4 人	59	51	13	21	17
日本BC	4—10	—	24				18
韓国KBO	4—10	3 人	30	26	2	18	13
台湾CPBL	5—10	3 人	28	39	3	24	2
中国CBL	6—10	2 人	0	0	0	0	0
イタリア IBL	6—10	3 人	38	20	2	13	3
オーストラ リアABL	11—2	—	56	80	6	55	6
イスラエル IBL	4—5	—	114	0	0	0	0

MLBとの開催時期がバッティングするリーグの中で、日本BC以外にすべてのリーグには外国人枠が設けてあり、外国人選手の受け入れやメジャーリーグ機構への移籍が多数ある中、中国には外国人選手「0」、輸出選手「0」の状態にある。

第2節 類似対象リーグとの比較

第1項 プレーオフの設計

表 3-4 試合フォーマット プレーオフ

	日本BC	中国CBL	イタリアIBL	オーストラリアABL
チーム数	6	7	8	6
地区制	2地区	2地区	無し	無し
地区別試合数 (同・他)	23・8	6・3	—	—
前後期制	前後期各36試合	無し	無し	無し
プレーオフ形式	複数のシーズンの 成績優秀者が行う	独立した組の成績優秀 者が行うもの	同一の組で再度決 定戦を行うもの	同一の組で再度決定戦を 行うもの
プレーオフ 進出チーム	地区前期、後期 優勝者2チーム計4	地区上位2チーム計4	上位4チーム	上位4チーム
プレーオフ(準 決勝)の決め方	3戦先取りの5戦	たすきがけ方式で 3戦先勝	9試合ずつ総当たり戦	3段階10試合。2戦先取り の3戦

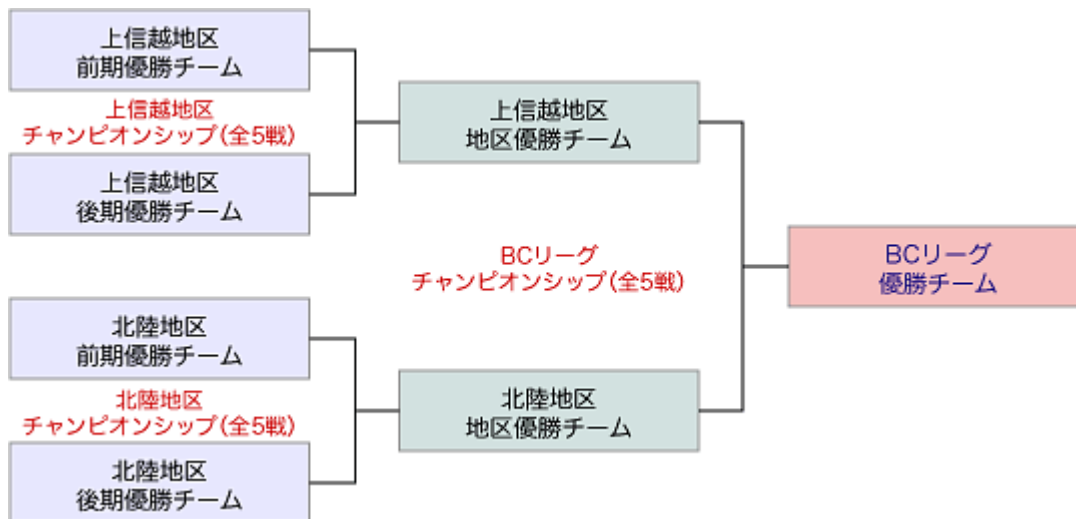


図 3-2 BCリーグプレーオフシリーズ試合方式

出典：BCリーグホームページ

BCリーグはCBLと同じく2地区制であり、ただプレーオフのフォーマットには違いがあると見られる。CBLと同じく2地区制を導入したBCリーグでは2シーズンに分けて、リーグ中盤に優勝争いの場面を設けてある。

第2項 地域国際大会

2013年にカリブ海地域に、各国の冬季リーグ優勝チームが雌雄を決する場として行われる国際大会である「カリビアンシリーズ」のほか、同じくリーグチャンピオンの間で行われ、1990年代以降にプロリーグが復活した中米3カ国（コロンビア、メキシコ、ニカラグア、パナマ）に、メキシコからメキシカンリーグの冬季ファームであるベラクルスリーグが参加する「ラテンアメリカンシリーズ」が新たに開かれた。

表 3-5 近年開かれたカリブと東アジア地区の国際大会

出典：Wikipedia、Weibo@盛璟新城棒球競訓基地より筆者作成

	ラテンアメリカシリーズ	海峡杯	アジア・ウィンター・リーグ
開始年	2013	2011	2012
参加チーム数	4	8	4
加盟国、地区	メキシコ、コロンビア ニカラグア、パナマ	中国、台湾	台湾、ドミニカ、 日本、韓国
チーム構成	各リーグのチャンピオン (メキシコではメキシカン リーグの傘下冬季リーグ ベラクルスチャンピオン)	中国CBL 上位4チーム・ 台湾企業 アマチュア4チーム	台湾CPBL、韓国KBO、ドミニカ プロアマ混成・ 日本 NPB(二軍・育成選手)混成
優勝チーム	2014年 Cartagena(コロンビア) 2013年 Brujos de los Tuxtlas(メキシコ)	2012年 台湾新市棒球隊 2011年 台湾新北市成棒隊	2013年韓国 2012年日本

これらのリーグの中で一番運営の安定度の高い（中断や休止の少ない）コロンビアリーグは、これまで再三にわたってカリビアンシリーズへの参加を訴えてきたがカリブ連盟への暫定加入は認められたものの、「レベルの差」を理由に、大会への参加は拒まれてきた。また、ニカラグアやパナマで復興したリーグは長年資金繰りに苦しんでいることから、年間40試合未満のリーグはカリブチャンピオンが争い合うカリビアンシリーズへ参加せずに、カリビアンシリーズのジュニア版とも言える当大会へ参加している。

一方、アジアエリアで10月から行われる国際大会「海峡兩岸杯」、それから「アジアウインターリーグ」がある。前者では、中国、台湾の協会が共催し、台湾の企業チームを相手に中国CBLチームの実力向上を目論んだ大会である。後者では、アジア初のウィンター・リーグとして台湾のプロ野球連盟CPBL(中華職業棒球大聯盟)が主催する日本、台湾、韓国(2012年リーグは未参加)3カ国のトッププロリーグの若手選手、そしてドミニカ出身のプロ・アマ選手を中心とした台湾各地で試合を行う冬季リーグのことである。「海峡兩岸杯」では短期決戦の試合フォーマットで、台湾側の参加チームはアマチュアのみとなっている。また、中国CBLは「アジアウインターリーグ」には参加していない。

第3項 MLBアカデミー

イタリアトスカナ州のティレニアに MLB のヨーロッパアカデミーが位置している。ここは MLB が自前の施設を作ったわけではない。行政によるスポーツへの援助が手厚いイタリアでは、オリンピック協会がここに強化センターを作り、その一つにベースボール・フィールドもあるのだ。これを野球連盟 (FIBS) が借り、それをさらに MLB にまた貸し出しすることで、アカデミーは成り立っている。2010 年 MLB による改組には、下部アマチュアリーグとの入れ替えをなくし、新たに二軍を設置する義務が各球団に課せられる。これを機に、イタリア MLB アカデミーは、各球団と契約をした選手を預かる場となっている。ここからイタリア人のリディ (マリナーズ) やマエストリ (オリックス) 両選手が米国 MLB そして日本 NPB への上昇移籍を果たした。そして、ここに毎年、夏から秋にかけての時期に、欧州各国から若い選手を集めてトレーニングキャンプを張るのである。2013 年には、旧東欧のモルドバなどをも含め、14 か国から選手が集まった。



図 3-3 イタリア MLBアカデミーの様子

出典：SportsNavi.com@阿佐智の「アサスポ・ワールド・ベースボール」

また、イタリア MLB アカデミーにて、欧州各国、アフリカ、オセニアン出身の若手選手をスカウトするのが目的であるの「ヨーロッパアカデミー」と言うトライアウトキャンプが毎年行われる。このプログラムは、MLB のスプリングトレーニングを模した形で行われ、練習と紅白戦を中心に実施される。統括責任者には、MLB でも監督経験のあるジョン・マクラーレン氏が就任。また、ブルース・ハースト、ウォーリー・ジョイナー、デール・マーフィー、クレイグ・シップリーという、MLB の元スター選手たちも指導に当たることである。

2013 年 7 月 31 日から 8 月 16 日まで行われた第 9 回には、ヨーロッパ各国とニュージーランドから計 50 名の若手選手たちが集結した。2005 年に初開催されたこの「ヨーロッパアカデミー」はこれまで、52 人が MLB 球団と契約している。2012 年には、マリナーズのア

レックス・リッディ(イタリア)が、同アカデミーOBとして史上初MLBにたどり着くことに成功した。

一方中国にあるMLBのアカデミーは「MLB発展中心」と言い、江蘇省あたりに3箇所を設置してある。従来のMLBアカデミーと大きく違うのは、野球を教えるためだけの単体アカデミーではなく、一般高校の中にアメリカ直輸入の野球部を植えつけるイメージでアカデミーを作っている。カリブ地域のアカデミーとは大分違って、学校での高等教育と、アスリートとしての育成の両立をめざし、若い選手たちに対してアカデミックなキャリアを犠牲とすることなく、プロ野球選手となることを目指すチャンスを与えることになる。

招いた若者を母体であるそれぞれの高校に入学させ、一般の高校教育を受けさせながら、野球を教える。給料などはもちろん払わないが、リクルートに合格した若者に高校3年学費など全額負担などの制度を持ち出している。



図 3-4 中国南京東山外国語高等学校「MLB発展中心」の様子

出典：Weibo.com@MLB College club

中国MLB発展センターのリクルート情報は以下のように公開されている。

・ 応募条件：

- 1、中国籍学生。
- 2、12～14 歳、中学校進学時の年齢で、男の子。
- 3、送球距離 200 f e e t (61 メートル) を基準に、肩の力に優れるほう。
- 4、短距離走 30 ヤード (27.43 メートル) 4 秒及びその以下を基準に、スピードに優
- 5、野球センスに優れるほう。
- 6、予測身長 1.77 メートル、あるいはそれ以上。(両親の身長と正比例する)。

・ 待遇：

- 1、中学校、高校一貫 6 年間全額奨学金 (学費、生活費、家賃含め)。
- 2、MLB 仕様、一流の練習設備 (MLB 標準の練習用服装及びユニフォーム、ロ

カールーム、トレーニングジム)。

3、一流の練習サポート（クリーニング代行、医療器具補助、指定病院）

4、コーチングはすべてMLB国際コーチングスタッフが担当。

5、週3回英会話レッスン

6、年8回中国国内合宿

第4項 新球場の利用状況

表 3-6 各国新築球場及びその後リーグの利用状況

	球場	使用球団	開場	地域	収容人数	試合・動員数		備考
日本BC	新潟県立野球場	新潟アルビレックス	2009年	新潟県	30000人	後期2回戦で初のホームゲーム	15311人	独立リーグ史上最多動員数
イタリアIBL	スタジオ・クアドリフォーリオ	パルマ・ベースボールクラブ	2009年	パルマ市	3000人	初年度年間平均	1600人	初年度リーグ最多動員数・リーグ優勝
中国CBL	大連体育中心球場 3面	なし	2013年	大連市	2800/1面	—	—	—
	景洪盛璟新城棒球競訓基地 6面	なし	2010年	雲南景洪	1800/1面	—	—	—

2007年に発足したベースボール・チャレンジ・リーグ（BCリーグ）のうち新潟県を本拠とする新潟アルビレックス・ベースボール・クラブは、7月12日の対信濃グランセローズ後期2回戦で初のホームゲームを開催し、四国・九州アイランドリーグ（当時、現在の四国アイランドリーグ plus）、関西独立リーグを含む国内独立3リーグで史上最多となる15,311人の観客を集めた。ほかにもイタリアのパルマ・ベースボールクラブが新築の球場を本拠地とし、プロリーグ発足初年度でリーグ最多平均動員数を成し遂げ、チャンピオンに輝いた。それに対し、中国には2010年に雲南省、2013年に遼寧省にスタンダード球場を建設したが、今の段階で前者は13年全国運動会以来使われていない、後者は中・台アマチュア選手の交流試合場としてしか使われていない。

第4章 考察

第1節 CBLは消費者を抱える国内完結型興行ビジネス

戦後、北米外での試合開催や選手獲得を中心とするMLBの海外進出が始まった。1950年代、MLBは国内のマイナーリーグの包摂を完成すると同時に、中南米カリブ地域のプロ野球との従属的な関係を築いていった。その結果中南米におけるローカルなプロ野球リーグが存在しながらも、MLBによるスカウティング網の拡大により有望選手を奪われ、興行的魅力をなくして消滅した。さらにMLBによる中米カリブ野球侵食は、1960～70年代の選手会とオーナーとの収入の分配をめぐる闘争の中ますます進行、1976年のFA制導入は選手年俸の高騰を招き、その結果、MLBはドミニカにおいて「アカデミー」という安価な選手獲得システムを確立した。1990年代になると、ビジネスとしての野球は太平洋を越えてその侵食の手を広げる。このMLBのアジア戦略の帰結が、先に述べた日米間のプロ野球の収益の圧倒的な差である。トップ選手を奪われたドミニカはレベルの低下とそれに伴う観客の減少に悩んでいる。かつて自立したリーグとして機能していた中南米カリブ海諸国・地域のプロリーグはMLBの育成組織としての機能しか果たしていない。

その次の段階である1980年代から90年代にかけて、野球を取り巻く国際関係は大きく変化した。社会主義キューバ経済崩壊は選手の亡命を生み、FA制度は日本、韓国にも波及、MLBを中心とする野球産業は更なる拡大を遂げる。そしてその拡大は、単に労働力である選手の獲得だけにとどまらず、マーケティングの拡大の念頭に置いたものになってゆくことだろう。実際、MLBの進める世界戦略は、すでにこのスポーツが伝わった地域から不毛の地への普及と変貌している。そこにあったのはドミニカパターンのMLBの出資によって立ち上げたイタリア、オーストラリア、イスラエルにあるプロリーグである。しかし、中国CBLの組織運営にはMLBの資本が一切関わっていない。MLBにより、アカデミーの設置を橋頭堡に現地リーグに投資をかけ、MLBのファームリーグ化とさせるこの一連の海外進出の取り組みは、2010、2013年に計3箇所にもMLB直輸出のアカデミーを設置させた中国にも着々と進んで行けるのか、今では推察できない話である。

MLBは戦後自由貿易の実現そしてグローバル経済拡大を機に国内完結型の社会的分業構造から、まずは中南米、さらに欧州、オセニアン、中国を範囲とした社会的分業構造へとシフトした。

「選手」を生産する装置としてのアカデミーが2000年後MLB単位でイタリア、オーストラリア、中国で設置された。さらに欧州、オセニアンの橋頭堡と位置づけられるイタリア、オーストラリアにおいて一歩先を行く製造装置として機能するプロリーグまで発足させた。中南米への進出を通して生じたのは、米国国内市場向けに、投資先からの製品や中間財（選手）の逆輸入、中南米諸地域の間双方向でやり取りする形で広域的な社会的分業構造が構築されてきていることである。また、自由貿易によって国際競争に晒されると国内産業が衰退する現象は中南米各国のリーグのMLB傘下化から読み取れる。一方、2000

年以降のアメリカ大陸外の進出は決定的に異なる意義を持つと考えられる。それは、資本の論理に忠実する資本拡大に伴い、2000年後多国籍企業の性格を強めたMLBは、海外現地市場向けにMLBの試合という最終財の現地販売を目論む複数拠点での生産転換である。

しかし、CBLの2014年シーズンの現状で言うと、人的資源である選手はすべて「国内生産」であり、生産措置として各省、市の体育局管轄の体育学校がその主力である。それから体育局と提携関係を結び、野球の推薦入学が認められ、トレーニング施設が揃う一部の中学校、高校、大学にも生産装置の役割を果たしている。また、金銭面においても、各球団のオーナーと見なされる省、市政府からのスポーツ援助金でチームは成り立っている。北京五輪が終わって、なおかつ五輪種目から削除されている今日、いわゆる「ポスト五輪タイム」においても、省、市が野球チームを持つことは、野球が文化大革命以前全国に根ざし、30を超える省、市、軍などがチームを持った歴史があることから理解に無理はないだろう。CBL発足時から北京五輪が終わるまで外資系スポンサー一色の時代から状況は一変、2014シーズンに、6業種に渡る国内企業にスポンサーについてもらう一方、リーグ運営に直接資金をつぎ込む国内スポーツマーケティング会社にリーグの運営を任せている。上述の人と金の面においてCBLは同規模の各リーグとは異なり、外国人選手や外資系スポンサー不在の中、国内需要・消費に必要な財を素原料加工から最終製品生産まで国内ですべて行って調達、集客に成功している。グローバル経済が極端に進展し、海外からの輸入や資本の進出が相対的に自由になった状況下での、後進国の自立・国内完結・向け発展の帰結と見る事が出来る。

第2節 「市場」を目指したトリプルミッションの構築

野球の世界をリードする立場にある国々においては、プロ野球は既に「産業」とも呼ぶことができる産業構造が成立している。それらは国ごとに完全に自立した存在になっており、巨大なマネーが随時に動いている。そして、そこには誰もが羨むような世界随一の技量を持つアスリートと、選手としてグラウンドに出られないものの、野球というスポーツに対する情熱ではアスリートたちにも負けない様々な人々が引き寄せられている。その理由は、選手をはじめ、トレーナーやマスコミ関係者、親会社や球団のフロントスタッフ、ウグイス嬢やスタジアムDJ、スタジアムの整備係、ボールボーイ・ボールガール、売り子のお姉さんや売店のおばちゃん、チアガールやマスコット等などこれだけ多岐にわたるプロ野球リーグに関連する職業は、すでに稼げる職業になっているからである。なので、如何にプロ野球リーグを稼げるようなものにするか、つまり「市場」にどうアプローチするかは、マイナー国中国においてプロ野球が自立で継続していく上でもっとも重要だと考えている。

ではまず、そのターゲット市場について見て見る。経済成長著しい中国においては国民の労働収入は右肩上がり、今後も続けて消費能力を増していくと考えられる。グラフ11は、世界各国の労働分配率を示している。中国における労働分配率が2008年から上昇軌道に乗り始めたのが見て取れる。一国の経済発展に伴って国民の収入に直影響する労働分

配率はU字の推移を描いているのはよく見られる。経済発展の初期には資本装備率は低く労働分配率は高い，資本装備率の上昇に伴い労働分配率は下がる，その後労働分配率は反転上昇する。図 4-1 の示しているように、収入の増加に伴って、今後中国国民がスポーツ観戦など娯楽に対する支出も増えていく見込みである。

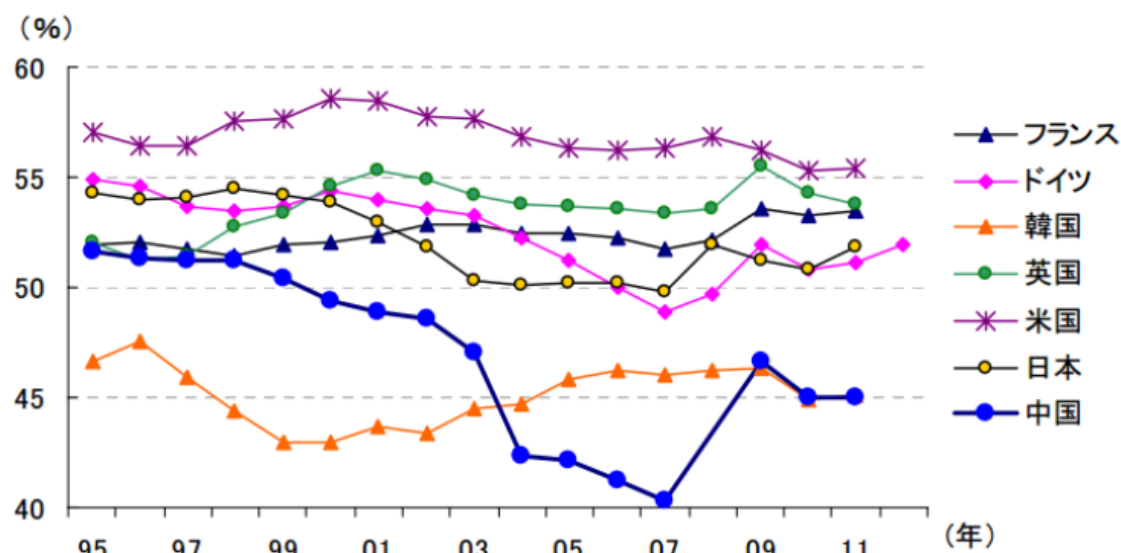


図 4-1 労働分配率の国際比較(雇用者所得/名目GDP)

出典：三菱UFJ銀行香港経済調査室資料

図 4-2 は、筆者が 2014 年 8 月 19 日～22 日に Wenjuan. com にアンケートフォームを設置し、中国の野球愛好者を対象に実施した C B L に関するアンケート調査アンケート結果の一部で、C B L への関心度をあらわしている。HP，SNSを通じて注目する人は過半数であり、実際に球場観戦に行く被験者も「よく」、「たまに」あわせて半分行っていないものの、47%には達していることから、C B L の市場にはかなりのポテンシャルを秘めていると言えるだろう。この市場を確保し、さらに拡大させて行くために、「勝利」と「普及」からアプローチする提言を行う。

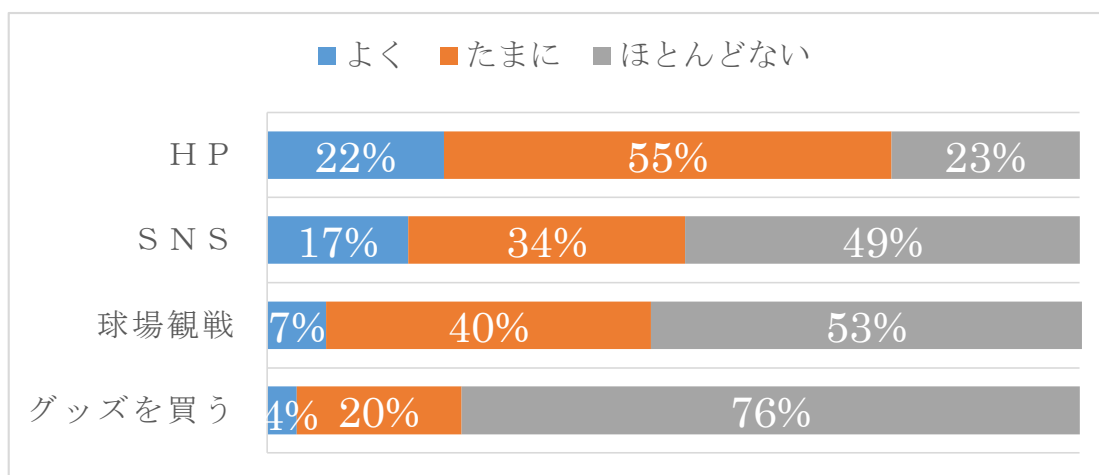


図 4-2 アンケート結果 CBLへの関心度 N/135

第1項 「勝利」からアプローチ

リーグの器に見合った国際大会への参加及び統合—カリブ海再興したリーグに倣う。

発足時期、並びに一人当たりGDPに対する興行ビジネスの規模においてCBLに類似しているカリブ海のコロンビア、ニカラグア、パナマの3リーグ、長年資金繰りに苦しんで、年間40試合未満の規模のリーグはカリブ海でもっともレベルの高いリーグの中さらに随一の実力を誇るチームが争う「カリビアンシリーズ」において戦える気力は言うまでもなく劣っている。それほど格式高い大会に参加しないと、メジャーなリーグに属するファームリーグでもあるメキシコの「ベラクルス」とシーズン後に組まれるドル箱試合を増やすことに精一杯だったので、カリビアンシリーズのジュニア版とも言えるラテンアメリカシリーズが発足する運びとなった。また、この大会には、日本のBCリーグから派遣された選手も参加していることから、国際シリーズとして発展させた大会であるといえるだろう。

一方、アジアエリアで10月から行われる国際大会「海峡兩岸杯」、それから「アジアウインターリーグ」がある。メキシコと同じく、国土面積の広い中国にも年中暖かい気温に恵まれる地域がたくさんある。おまけに海峡兩岸杯の開催地雲南省には新築の球場6面があり、女子ソフトボール代表チームの指定施設に認定されたことで設備向上に拍車がかかる。今やアジア強豪チームに歯が立たない状態にあるCBLの実力を底上げすることに出るかぎり海外チームと試合することが必須だと考えられる。それに海峡兩岸杯やアジアウインターリーグに参加するチームは各地のプロリーグから育成目的で絞られた選手で構成したチームで、競技レベル上もっともCBLチームに合っている貴重な海外相手である。

以上のことから、冬季(通常はシーズンオフ)の温暖な気候を利用し選手の育成を目的としたリーグ戦を統括、あるいは統一などの手段で、オフシーズンに積極的に海外チームと試合をこなす場を確保することがCBLにとって「勝利」に向けて極めて重要、且つ現実的な方策だと考えている。

・アカデミーとの連携—イタリアに倣う

発足時期、一人当たりGDPに対する興行ビジネスの規模並びに国民平均月収に対する選手の平均月収においてCBLに類似しているイタリアIBLは、中国と同じく国内にMLB単位のアカデミーが設置されている。アカデミーの運営方式とプロリーグとの連携に関してIBLから、リーグとの人的交流、公共団体の施設によるMLBアカデミー招致、それからトライアウトキャンププログラムの実施について学ぶべきと考えられる。

2010年MLBとの契約によって、各球団には二軍持ちが義務付けられる。このことから、MLBアカデミーはイタリアIBL二軍の育成装置として大きく機能し始めた。中国CBLの各球団も、中国のMLBアカデミーに選手を預けて、育成するなどの提携関係を結ぶと良いと考えている。

そして、球団は各省、市が持つCBLは、地元の公的スポーツ援助金などを活用し、作られた施設をイタリアのようにMLBに貸し出す形を取っていけば、より多くのMLB選手育成拠点が増えていくだと考えている。

また、欧州各国、アフリカ、オセニアン出身の若手選手にとって大きな見せ場となっているMLB「ヨーロッパアカデミー」のようなプログラムもMLB側と共同で積極的に導入し、それを海外に中国の野球を発信する装置に仕立てることが期待される。「中国で野球をしよう」と選手に思わせるような仕組みを作ったら、プロリーグCBLへの入り口にでもなりうると考えている。

第2項 普及からアプローチ

2014年シーズン、リーグが再スタートすることにメディアから関心が寄せられる。共産党の下部組織である青年団の機関紙「中国青年報」、「北京晩報」、テレビ局の中央テレビ、北京テレビ、アモイテレビなど、相次ぎCBLの復活を機にリーグ戦を報道し、選手たちや監督へのインタビューもたくさん盛り込んでいた。



図 4-3 中国中央テレビによる 2014 シーズン表彰式に関する報道

出典：Weibo.com@CHINA 棒球频道



図 4-4 北京テレビによる 2014 シーズン北京タイガーズベテラン選手王伟氏のインタビュー

出典：Weibo.com@CHINA 棒球频道

また、2014 シーズン終盤、試合が行われる北京タイガーズのホーム球場、北京豊台体育中心野球場現場に足を運んだ観客が平均 1 試合 2000 人を超えた。そこには学生たちの姿が特に目立っていた。その中に中国伝媒大学野球社の仲間たちがバスを貸し切って球場観戦に向かったなど熱意を示している。

中国国内で、野球の草の根の普及にMLBが本腰入れて展開しているのが「棒球樂園」という野球体験イベントである。すでに映画の題材にされたインドでMLBが行う野球才能を秘める若者を町で野球を試し投げさせるイベント「ゴールデンアーム」とは違って、毎年5月から10月にかけて、つまりCBLのシーズン中に国内の特大都市のランドマーク商業施設にて行われ、有望種発掘より、これらの特大都市の消費能力が高い住民たちの間でMLBの認知度を上げることで、中国という見込み市場の開発を図ることがその思惑であるだろう。また、MLBが製作するMLBコンテンツしか入っていない20分間のテレビ番組「棒球週刊」を地方、並びに全国テレビへの露出を図っている。

下の図、表が示している通り、「棒球樂園」のルートにCBLのフランチャイズ市がすべて入っている。「棒球週刊」が放送される地域にもCBLのフランチャイズ市がすべて入っている。

	アモイTV	省テレビ	205 万	2011 2013	2012 145
	広東TV体育チャンネル	市テレビ	1.05 億	2011 2013	2012 2014 196
	広東TVヨーロッパサッカーチャンネル	市テレビ	1.06 億	2011 2013	2012 2014 266
	シンセンTV体育チャンネル	市テレビ	709 万	2011 2013	2012 2014 245
全国	北斗伝媒デジタル 体育チャンネル	遼寧テレビ有 料ケーブル	2000 万人	2011	165
	北斗伝媒ゲーム 競技チャンネル			2011	240
	北方互動 電子体育チャンネル	有料ケーブル	450 万	2012 2013	245
	北方新媒体 電子体育チャンネル	パブリックTV	300 万	2014	196
	北方新媒体城市電視	パブリックTV	450 万	2014	196
	樂視 IPTV	ネットテレビ	105 万	2014	146



図 4-6 アンケート調査による被験者の I D 分布と C B L チームの所在 N/135

青：社会人チーム所属 赤：大学チーム所属 緑：無所属

また、筆者が 2014 年 8 月 19 日～22 日に Wenjuan. com にアンケートフォームを設置し、中国の野球愛好者を対象に実施した C B L に関するアンケート調査の被験者の I D から座標を読み取り、GeoLite2 (<http://dev.maxmind.com/geoip/geoip2/geolite2/>), Python ベース geoip. py (オープン) と pick_data. py を使い、R 言語で被験者の分布をプロットした。図 4-6 が示しているように、C B L 球団の所在地にはより多くのプロットがあった。

以上三つのデータから、C B L のフランチャイズ都市において野球の普及はすでにある程度進んでおり、比較的いい土壌が整えているが、C B L、そして C B L 各球団による普及活動はまだ実施されていないのが現状である。今後、C B L にとって M L B などによる普及の成果を直接に利用できる一方、各球団がそれぞれのフランチャイズ都市にて普及活動を実施し、自らファンを育てることが今後の集客繋がり、興行の肝となるだろう。

そこで C B L と類似している B C リーグの以下の地域密着型経営手法は、これから球団人気定着を目論む C B L 各球団にとって学ぶべきところだと考えている。

地域密着型球団経営のポイントボールパーク化計画選手との交流、楽しいアトラクション、地元の美味しいフード、種々の応援グッズなど、感動と魅力にあふれたスタジアムづくりを目指すこと。各球団の監督・コーチ・選手が数名単位で県内各地の少年野球チームや小・中学校を訪問し選手たちが子供たちの良き「お兄さん」となって親身に指導する巡回型野球教室による普及活動。各球団は、特定の地域に偏ることなく各県内全域の球場を使用して各県内全域で試合開催すること。各球団が、地域振興イベントやボランティア活

動などにも積極的に参加すること。地域に密着し細分化された地域後援会を基盤とするサポーター組織の確立各県内全域に渡って地域後援会を構築することにより、地域に密着し、皆様から愛される球団経営を目指すこと。

第3節 トリプルミッションの好循環に向けて

以下の図4-7は筆者が実施したアンケートの結果の一つである。勝利に指向するコーチ、監督など人員完備、選手獲得ルートの充実、移籍制限の緩和。そして普及に指向する民間競技人口、愛好者人口、メディア露出、または市場に指向する社会からの協賛、体育局からの資金援助、市場開発と言った9の要素を被験者に順位付けさせた。上位3位に付けられた項目はすべて普及に指向する要素であることが分かった。

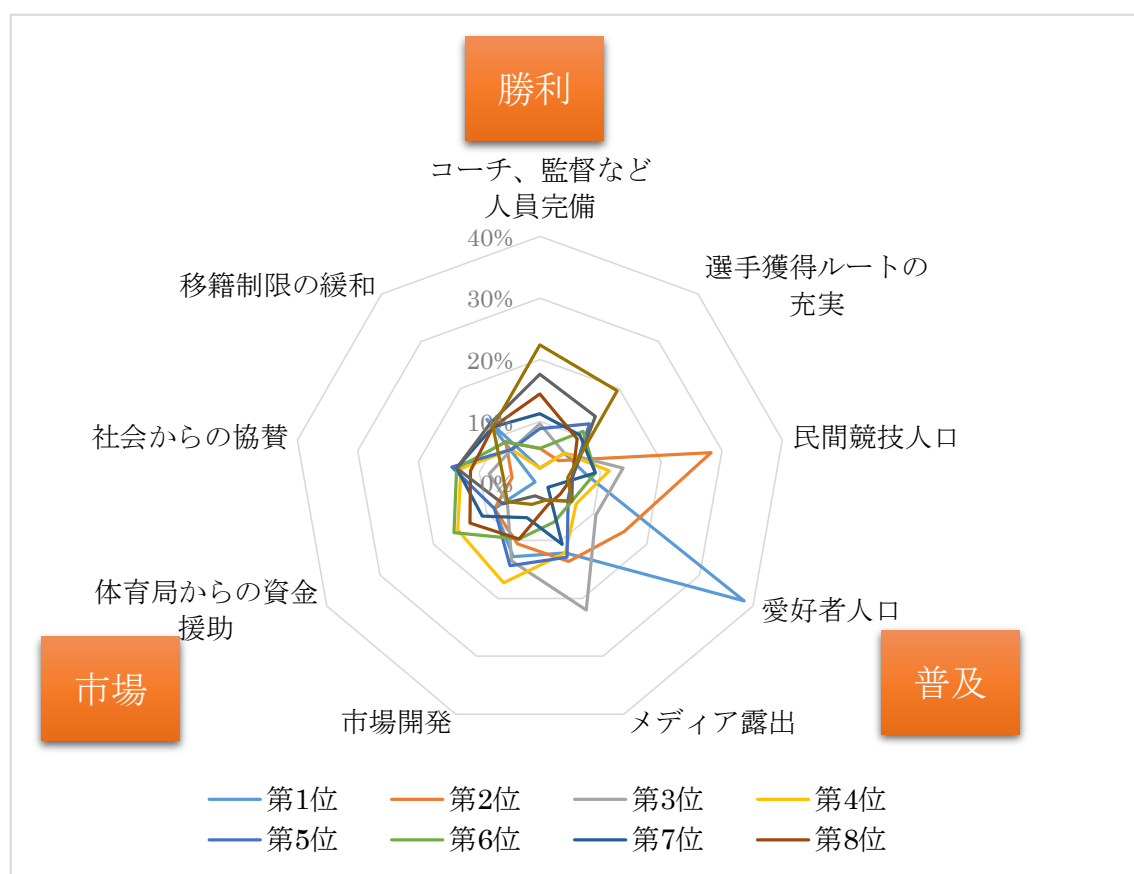


図 4-7 アンケート結果 CBLが発展していく上での重要要素ランキング N/135

中国には野球が早くも20世紀頭に伝来し、普及はある程度進んだにもかかわらず、「文化大革命」により弾圧を受け、野球は中国から去ってしまった。今現在、野球は中国においてマイナースポーツの域を脱することのできない状況にあるに違いない。そのため、MLBが主催する町中で行われる普及イベント、BCリーグの球団ごとのファン育成に繋が

る地域密着活動などや、国内メディアによる報道や番組放送などを通じて、普及を目指すことが最も肝心である。メディアでの露出にもMLBが積極CBLの2014シーズンに対し国内メディアは関心を示しており、また、中国中央テレビCCTV5スポーツチャンネルの拡充として、国内外の各たるスポーツの中継やビデオ放送に特化したチャンネル「CCTV5+」が2013年に新たに設立され、今はすでにアメリカプロアイスホッケーNHLの試合放送を始めたことから、CBLや野球に関するコンテンツのメディア露出はさらに増えていく可能性を秘めている。球団活動やメディアによって野球に興味を持たれていたら、実際に生で見られて体感できるのがCBLの試合である。こう言ったファンたちに球場に足を運んでもらい、グッズをかってもらうのと同時に、近隣諸国リーグとの交流試合を沢山組み込むことやMLBアカデミーに選手を預けて育成することなど、リーグのレベルの底上げすることで、より良いコンテンツとしての魅力が社会に次第に伝わったら、社会からスポンサーが集ってくること、資金面に繋がっていく。そして得られた収入を選手たちに還元し、それで選手の賃金水準引き上げることができれば、もっと海外からのいい選手が目向くようになるだろう。リーグのトリプルミッション好循環ができれば、アジアにおいてより大きい声で発信することが期待され、アジアの強豪を相手にますます成長を遂げていくことになるだろう。

第5章 結論

本研究では、ポスト北京五輪時代において経営難に強いられた末一旦休止を経て、2014年に自国のスポンサーを抱え込んで再スタートした中国のプロ野球リーグCBLを世界中のプロ野球リーグとの比較分析を通じて、比較対象との差異を明らかにした上、今後のCBLの発展方策を提言することを目的とした。目的を達成すべく、中南米7リーグ、アジア5リーグ、オセアニア1リーグ、ヨーロッパ1リーグ、中東1リーグを中国CBLの比較対象とし、各国プロ野球リーグの組織変遷及びMLBとの関連性、各国プロ野球リーグの興行売り上げ規模試算及び選手の賃金水準及び各国プロ野球リーグのレギュレーションなど三つの角度で比較し、相違点を浮き彫りにした。さらにCBLと類似性を持つカリブ海2リーグには地域国際大会への参加及び統合、イタリアIBLには現地MLBアカデミーとの連携、そして新球場の起用、BCリーグにはプレーオフの設計、新球場の起用そして地域密着策と言った面において、CBLとして類似リーグに模倣し、現状を改善していく余地があるだと結論づけた。

第6章 謝辞

本研究の執筆にあたり、2年間にわたって平田竹男教授に様々な御指導を頂きました。平田先生の厳しさに怖がる中でスタートしたゼミ生活を振り返って、厳しさより深い愛情のある御指導を頂きました。

そして、副査を務めて頂いた中村好男先生には研究に対し、貴重なご意見を頂きました。同様に副査を務めて頂いた日下部大次郎先生には研究や論文に対し、きめ細かいご指導を頂きました。また、スポーツ科学部児玉有子先生には2年間に渡って勉強を暖かく見て頂きました。この場を借りてお礼を申し上げます。

本研究を行うにあたり、多くの方々の協力のおかげで完成することができました。関わって下さった全ての方々に感謝の意を申し上げたいと思います。

最後に、2年生コースの先輩である三澤翼氏、後輩である奥下諒君、藤井暢之君、松本尚己君、学部ゼミ生諸君、そして、勉学も生活も多大なサポートを頂いた同期の久保谷友哉氏、山本亜雅紗氏には大変お世話になりました。心より感謝の意を申し上げます。

平田先生のゼミで学んだことや感じたことはどうも片言では表せません。今後は社会人として自立し、この2年間で身に染みたことをいつかスポーツ界に還元したいと思う次第であります。

第7章 参考文献

- 1) 石原豊一、2013「ベースボール労働移民—メジャーリーグから野球不毛の地まで」。河合出版
- 2) 谷口輝世子、2004「帝国化するメジャーリーグ」。明石書店
- 3) フランク・アンドレ・G大崎正治他訳、1976「世界の資本主義と低開発—収奪の中核—衛星構造」拓殖書房
- 4) ジンバリスト、アンドリュー、鈴木友也訳、2007「60億を投資できるMLBのからくり」ベースボールマガジン社
- 5) 小林至、2009「産業としての日本のプロ野球とマネジメント」一橋ビジネスレビュー
- 6) 佐々木 勝、2011「賃金はどのように決まるのか——素朴な疑問にこたえる」日本労働研究雑誌 No. 611/June 2011
- 7) Joanna M. Shepherd and George B. Shepherd、2010「U.S labor market regulation and the export of employment : Major League Baseball replaces U.S players with foreigners」Clemson University, SC29634, Emory University school of law, GA30322
- 8) The Labor Market of Major League Baseball : Player Salaries and How They Relate to
- 9) On-Field Performance Eric Wolf Economics Senior Project Cal Poly - San Luis Obispo

- 10) Advisor: Michael Marlow Spring 2010
- 11) Labor Markets in the Classroom: Marginal Revenue Product in Major League Baseball
- 12) Craig A. Depken, II and Dennis P. Wilson1JOURNAL OF ECONOMICS AND FINANCE
EDUCATION · Volume 3 · Summer 2004· Number 1
- 13) アメリカンベースボールデータベース
<http://www.baseball-reference.com/minors/player.cgi>
- 14) Lahman.com
- 15) baseballworld.com by Journeyman Media
- 16) THE OFFICIAL SITE OF MINOR LEAGUE BASEBALL
<http://www.milb.com/milb/stats/>
- 17) THE OFFICIAL SITE OF THE AUSTRALIAN BASEBALL LEAGUE
<http://web.theabl.com.au/index.jsp?sid=l59>
- 18) U. S. Census Bureau (“Census”)
www.census.gov/
- 19) Boston.com
- 20) Weibo.com
- 21) Douban@豆瓣打棒球 <http://www.douban.com/group/doubanbaseball/?ref=sidebar>
- 22) 中国棒球协会官方网站
baseball.sport.org.cn/
- 23) 虎扑体育论坛
<http://bbs.hupu.com/>